

モリ カルソン 米国出身の元キリスト教徒（下）

:

明:彼女は最終的に、イスラムがずっと前から自分自身の一部であったと感じるようになります。

目: [事新改宗者ムスリムの逸 女性](#)

より: モリ カルソン

日13 Apr 2015

集日 13 Apr 2015

私がイスラムについて べ始めたのは、2001年の9 11事件直 でした。当 は大学に入学したてで、18 でした。

それ以前、サウジアラビア出身の女性と一 に いたことがあります。また をベルで覆いしたパキスタン人少女の家庭教 をしたこともありますし、パレスチナ人男性の友人もいました。程度の差はあれ、信仰に なくすべてのムスリムに 着を抱いていました。

私が家庭教 をした女の子とは、それ以来地球上で最も仲の良い友人となり、いつも彼女の文化のことについて しました。しかし、9 11の はイスラムと彼女の信仰についてより しく するようになりました。

私はそれらムスリムの人々を知っており、そこには一人もテロリストや原理主 者などいませんでした。そして彼らはその宗教に 属しているという理由だけで相当な数の憎 にさらされていました。事件直 の数ヶ月は特にそれが 著でした。

私は自分の家族や友 に して憎 について忠言するため、より多くの知 を得ようとしてました。人は理解しないものに して恐怖するものだからです。

私はパキスタン人の友人からアバ ヤとヒジャ ブを借り、それらを着けたときにどのような をされるのか自分の目で かめるため、それを学校と に着て行ったりもしました。

それらを着てさえいなければ一般的なアメリカ人女性として われたのです。

その差は めて 著でした。それはあからさまに辛辣で、ある 面で私は泣きだしてしまっただけです。私の友人への敬意は し、当 からそれは少しも わりません。彼女は私のヒロ ンでしたし、今でもそうなのです。

彼女、そして私と同じような 境で育った改宗者の男性である の 友は、私にとって最も大きな影 を与えました。

その改宗者の友人とは、イスラ ムについて何 ても会 できました。なぜ改宗したのかや、いかに改宗したのかに して、またあらゆる情 を彼は惜しみなく共有してくれました。

彼は私が持っていたものと同じ疑 を持っていたため、それについての答えをくれました。彼がいなければ、私は今のようなムスリムになってはいなかったでしょう。その3年半に渡り、私のイスラ ムへの理解はゆっくりながらも着 に んでいきました。

私はイスラ ムに して敬意を抱いてはいましたが、 に自分自身がムスリムになるというところまでは考えてはいませんでした。そして、それは私の人生で最も困 な 断でした。

ここから私が述べる部分は、 に は らずに伏せておくこともあるものです。なぜなら、私がムスリムになった理由のうちの一つとしては 性がありますが、根本的な理由としては がないからです。者 に しては正直にあるべきなので、これは重要なことです。

他のムスリムが私のヒジャ ブを目にしたときにする は、「あなたはムスリムですか？」ですが、その に来る2つ目の の99%が「ムスリム男性と 婚しているのですか？」なのです。そこには、私がムスリム男性との 婚をきっかけに改宗したのではないかという が められています。

それに してはいつも「いいえ」と答えるのですが、ひとりの男性が わっていなかったといえは嘘になります。改宗の 程における最 段 にはムスリム男性が わっていたからで

す。彼のプライバシー と名誉のため、彼自身のことについての は述べませんが、そのことについては明らかにしなければなりません。

それはなぜかという、人々は既に 婚もしくは婚 している改宗者を目にすると、彼らはその 性のために改宗したと思うからです。私はそれが必ずしも当てはまるのではないということを明 にしたいのです。

もしも私が彼のために改宗したのであれば、彼が 婚を申し んできたとき、私は彼と 婚したでしょう。しかし私はそうしませんでした。そしてそれは人生において2番目に しい 断でした。彼は私の目 ではなく、私にとっての扉だったのです。彼を通して私は人として、そしてムスリムとしての人生の中で最も重要な人々と出会うことができました。

たとえば、オスマ ン一家は 躊躇することなく私を受け入れてくれました。彼らは私の男友 が私を れてきたからといって非 の言 を したりはしませんでした。そのことについて、また他の多くの事柄について私は彼らを尊敬しています。彼らと出会った最初の夜、彼らの家族の で、私はとても居心地よく ぐすことができましたし、私は既に彼らの 一 として われていました。

おそらくアッラ は、オスマ ン一家の父 に知 を授け、私を 迎すべきことを知っていたのでしょう。 者の皆 には100%の 信を持って、もし私がオスマ ン一家と出会わなければ、今のようなムスリム女性としての私はなかったでしょうし、イスラ ムに改宗すらしなかった可能性もあることを断言することができます。

バイ ジ と彼の一家は、私にとっての一番のヒ ロ であり、最も すべき人々であり、最も大きな影 であり、最も 大な教 たちです。私は彼らに してあらゆる借りがあります。

彼らと出会った4ヶ月 の2005年3月初旬、自分が わったことを 感じた私は、彼らのリビングル ムで、私をこよなく してくれる人々の前でシャハ ダをしたのです。

「私は唯一なる真の神以外に神はなく、ムハンマドが神の使徒であると 言します」という真理の 言をしたときの私の感情は、言 に表すことなど してできません。

あたかも内 から光り き、爆 して光の粒子になってしまうかのような感 にとらわれました。神の手が私の内 から罪を取り除き、私をまっさらな状 にしてくれているような感じもしました。その の究 の幸福感は、私の中で永久に生き けることでしょう。なぜなら私はその瞬 、天国を垣 たからです。

そのとき、すべてが わったと悟ったのを えています。 、すべてが わったのです。私の人生を通して、私は今の自分のままでしたが、神の御意により、22年 でそれを 感ずることができるようになったのです。

あの日のあの 断以来、私はもう 去を振り返ったりはしません。 去の1年半では、これまでの22年 の人生よりも、さらなる意味とさらなる幸福を 出したため、自分の行いは 悔してはいません。

私は今の自分以外の にもなることはありません。そしてそれこそが、私の魂にとっての真の改宗なのです。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/2781>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。